

2 越谷コミュニティセンター サンシティ越谷市民ホール

アウトリーチによる“ひろば”づくりを

1. ホールの概要

- 開館年 : 1979年
運営母体 : (財)越谷コミュニティセンター
都市人口 : 30万9千人
- 施設全体の延床面積: 17,785m²
- 大ホール : 1,680席
小ホール : 490席
- 管理時間: 9:00 ~ 21:30
休館日: 月曜日(祝日の場合は翌日)、
年未年始
- 運営スタッフ総数: 34名
(非常勤含)
企画系スタッフ数: } 7名
芸術普及担当者数: }
(企画系スタッフ数、芸術普及担当者数は内数)
- 所在地・所在地:
〒343-0845 越谷市南越谷1-2876-1
tel. 0489-85-1111
fax. 0489-85-1119
- URL:<http://www.mesh.ne.jp/suncityhall/>

2. ホールの特色、事業概要

- 目的:(財)越谷コミュニティセンター・サンシティ越谷市民ホール(以下「越谷市民ホール」と略)は、大ホール、小ホールといった文化施設のほか、結婚式場や集会議室が併設された市民のための総合コミュニティ施設。
- 鑑賞事業、市民参加型事業、市民文化育成事業を3本の柱として、それぞれが相乗効果を生み出し、市民文化を育成するための事業を実施。
- 主な自主事業(1999年度、後述の芸術普及活動を除く)
 - チェコ国立ブルノ歌劇場オペラ「カルメン」

- サンシティクラシック・ティータイム コンサート
- フェリ&マラーホフ/東京バレエ団「ジゼル」等

- 自主事業数: 38本(1999年度)。
- ホール稼働率: 大ホール:64.5%
小ホール:71.1%
- 自主事業予算: 1億1,992万円
芸術普及予算: 2,239万円
(上記自主事業予算の内数)

3. 芸術普及活動導入の背景、経緯

- 越谷市民ホールでは、開館以来、興行型の鑑賞プログラムが中心だったが、埼玉県内にホールが続々と建設されるにつれ客足も鈍くなり、特にクラシック関係では集客に苦労していた。
- 平成6年に芸術監督として、作曲家の坪能克裕氏が就任、鑑賞事業、市民参加型事業、市民文化育成事業を3本柱とし、文化を自給自足できる土壌づくり、国際的な交流のできる環境づくりを目的とする活動をスタートした。

◎ 芸術普及活動の理念と構成

- 越谷市民ホールでは、鑑賞すること、企画・制作すること、出演すること、そして評価することに対し、いつでも、どこからでも、誰でもが参加できる、言わば「循環する構造」を持っている。これは、文化施設を中心に、学校や各種文化財団、市民が「循環する構造」でもある。
- 越谷市民ホールというハードを市民に開放し、市民が気楽に集まる場所にするため、参加の形式としてはさまざまな講座やワークショップを恒常的に行うほか、企画事業では一般公募も行う。「この指とまれ」方式で、堅苦しくなく、遊びながら質のいいものに加わるようになっている。

「第3回クリスマスコンサート」
風景



- 鑑賞に関しては、アンケートを常に行い、希望を取り入れたプログラムを組んでいる。
- いいものをいつでも安く鑑賞できるだけでは「文化の消費」。創造につながる何かをつくるのが公共ホールの役割であり、そのために、市民一人一人がお互いの価値観を認め合う場をつくる必要がある。
- 市民参加型事業では、どんなに下手な人でも参加が可能で、参加の喜びを味わえるプログラムを組む必要がある。たとえば、クリスマスコンサートでは、本格的な照明や音響の中で、プロのオーケストラと同じ舞台に立ってもらうなど、「楽しかったのでまた参加したい」と思ってもらえる事業を実施している。
- このように、市民参加型事業というより、市民が主体的に企画した事業が中心。

4. 芸術普及活動の内容と運営

◎ 芸術普及活動の構成と内容

- 越谷市民ホールでは、ホールの3本柱の一つとして、市民文化育成事業を実施。この事業は、文化の基礎講座、文化リーダーの育成、文化団体の育成、循環構造への誘い、オリジナル企画、といった多種多様な事業から構成されている。
- 市民のニーズにあわせた数多くの市民文化育成事業を実施しており、具体例は次のとおり(1999年度)。
 - せんげん台児童合唱団の育成
 - サンシティ落語研究会
 - 話し方・朗読研究会
 - レジデント・アンサンブルの育成
 - 笑いの会
 - 狂言のたのしみ
 - 子どもの日／クリスマス／夏の子児童合唱団

- ミュージカルファンタジー
- 夏祭りファミリーソングをうたう

- 越谷市民ホールでは、当初から教育プログラムが主体。その目的は、市民を教育しようという押し付けのものではなく、要所にプロを配し、市民のさまざまなニーズにあわせて参加ができるしくみを用意すること。
- 市民文化を育成するため、出たがりの人、裏方でもいいので舞台を作りたい人、鑑賞を楽しみたい人、一言言いたい人など、それぞれの参加の希望にあわせた基礎講座を用意し、希望が叶うようにしている。
- 例えば、作りたい人のためには、市民プロデューサー講座、舞台照明・音響・制作の講座、作詞・作曲・編曲・指揮等の基礎講座等を用意して、それぞれ、グレードにあわせた参加が可能なくみを用意されている。
- 鑑賞を楽しむだけではなく、意見のある人には、市民の舞台を顕彰する「芸術撰」に審査員として採用している(サンシティ芸術撰市民審査員)。市民の評判もよく、専門家ばかりを集めるよりも、おもしろい評価が出て、意外とバランスがとれたものになる。
- 各種講座や企画事業で集まったメンバーの中から、自分たちで自主的に団体を組織して活動を始めたグループには、3年を目処にサポートを実施。

◎ 文化リーダーの育成

- 各種企画への参加者や講座等の終了者、また会館と市民との文化のパイプ役を長年継続し、かつ一年以上のボランティア(社会貢献)経験を有し、今後もその活動意思を持つ市民を文化リーダーに認定し、リーダーズ・バッチを授与している。

◎ 主な芸術普及事業の概要

事業の名称(開始年度)	事業の内容(実績は1999年度)、課題や今後の展望				
演劇ワークショップ'99 (1997年度)	<ul style="list-style-type: none"> ● 先生のための演劇ワークショップ:小・中・高校の先生を対象にした1日集中型の演劇ワークショップ。演劇部の顧問の先生に限らず、さまざまな分野の先生を対象とした内容。演劇の重要な要素である言葉と体を使っての自己表現とコミュニケーション、そのもとになる体と心の結びつきについて、実際に体を動かしながら考える。 ● 照明で創る演劇空間:高校生以上の一般の方を対象にした照明デザインのワークショップ。基本的な照明設備の使い方、色々な布などの素材と照明の関係、照明だけの効果で同じ場面がどれだけの多様性をみせることができるかなどに、プロのセンスとテクニックそして参加者のアイディアも取入れて挑戦する。 ● 高校生のための演劇ワークショップ:高校生を対象とした平田オリザと安田雅弘によるワークショップ。 ● 劇を書いてみよう:戯曲ってどういうもの? 劇を書くことと小説や物語を書くことはどう違うの?こんな疑問からスタートするワークショップ。 ● 高校生以上の一般の方を対象にした公演とセットになった演劇ワークショップ:演劇を上演する劇団山の手事情社と青年団の公演前に、それぞれの劇団による演劇づくりの手法を学び、実際に短いお芝居を創作する。 				
	対象	参加者数	実施頻度	参加料	予算規模
	一般市民、教員	140名	年4～5回	-	-
音楽づくりによるワークショップ (1997年度)	<ul style="list-style-type: none"> ● 地域および全国の青少年少女(小・中学生)や教員、文化施設および行政スタッフなどを対象としたアウトリーチの教育プログラム。 ● 市教育委員会を通じ、小学校および中学校の数校で、授業の特別カリキュラムや学校行事(音楽発表会)などへの取組みに協力する形でのワークショップを多彩な形で実施。 ● 内容は、音楽の簡単な構造を基に、現代音楽や民族音楽を含むさまざまな様式の音楽と関りを持ちながら、プロの演奏家との共同作業の中で子ども達(もちろん大人たちも)自身が音楽をつくり表現していく方法であり、この中で、子どもも大人も、プロもアマチュアも、年代や技量を越えた“価値の交流”や“創造の共有”等を経験し、その経験が地域をとりまく芸術文化の普及に寄与するものと考えている。 				
	対象	参加者数	実施頻度	参加料	予算規模
	一般市民、教員、文化施設および行政職員	20～30名	年4～5回	-	-

「せんげん台児童合唱団」
訪問コンサート風景



- この文化リーダーは、市民とコミュニケーションしながら、文化会館と地域とをつなげるさまざまな活動を行っている。
- 最近では、社会教育と学校教育は共通する部分が多くなってきたため、文化リーダーは、学校と交流したり、高齢者や障害者と交流する必要性が出てきている。児童合唱団との関わりの中では、各家庭の父母との交流も重要。

◎ 歌のおねえさん & おかあさん

- ボランティアとして積極的に地域とのコミュニケーションを推進している文化リーダーの代表的存在が、「歌のおねえさん & おかあさん」である。
- ホールを地域に開放していくための支援者を、ホール自身で発掘し、育てていこうということで、市民を対象とした歌唱のコンクールを行い、本選に残った人たちに余暇を利用したホールでのボランティアを呼びかけた。この中の数十名が「歌のおねえさん & おかあさん」として現在のホールの活動の中心となっている。
- 「歌のおねえさん & おかあさん」は、何らかの音楽経験者が多い。中には、学校の先生もいて、教育的配慮が行き届いている。第2回・第3回のコンクールの「歌のおねえさん & おかあさん」では、越谷市外の人もいるが、土壌となる文化環境がないため、活動が難しい面もある。事業規模の縮小もあって、次世代の育成が課題。
- 事前訓練では、歌の指導よりもコミュニケーションのトレーニングを重視。必要なのは、「歌のおねえさん & おかあさん」ではなく「歌のおねえさん・おかあさん」。その場の人思わず参加したくなるようなコミュニケーションづくりができるよう、1年間、かなり徹底したトレーニングを行った。
- 「歌のおねえさん & おかあさん」は、余暇を利用してというスタンスだが、社会との接点を大切にしており、消防署の慰安会、敬老会、謝恩会、子ども会などにアウトリーチするなど、幅広く、前

向きに活躍している。プログラムは、童謡などのみんなで歌える歌とコミュニケーションが中心で、場が和むということと呼ばれることが多い。うまい人には、また依頼がくる。

- 「歌のおねえさん & おかあさん」の派遣は、トラブルを避けるため、交通費や謝礼も含め、すべて会館を通して申し込むしくみ。その結果、謝礼の額も徐々に上昇し、継続するケースでは予算化するところも出てきた。
- 行政の手が届かない部分に自分たちでグループを作り、アウトリーチしてくれることで、地域文化育成の重要な担い手となっている。ホールからこういう人が育つということを市民にアピールできるホールの宣伝Woman的な存在でもある。
- 「歌のおねえさん & おかあさん」のほかにも、現在では、朗読のグループも積極的にアウトリーチ活動を展開している。

◎ 地域のコミュニティ文化の育成

- 市民文化育成の次のステップは、市民参加プログラムの中で、舞台製作の勉強をしている人、コンサートを開きたい人など、市民相互で協力し合えるよう、橋渡しの役目を担うこと。
- 市民同士の情報交換に基づいて実施した成功例は、「シンガーソングライターズクラブ」が「せんげん台児童合唱団」に子ども向けの歌を持ち込んだケース。子どもは正直で、歌いたい曲は一回で覚えるし、翌週になっても覚えているので、反応がわかる。子どもに人気のあるものの中には小学校の教材として歌集に載っているものもある。
- せんげん台児童合唱団は、「歌のおねえさん & おかあさん」の一人が、子どもたちに合唱を教えたいと始めたもので、75～80名の子どもが参加。せんげん台は会館から遠い新興住宅地のため、会館の手が届かないことに不満の声も出ていたが、こうした文化活動の拠点ができることによ

*1・ロンドン・シンフォニエッタはイギリスを代表する現代音楽のアンサンブル。指導的な立場の作曲家やアーティストの力を結集して、革新的な手法の教育プログラムにより、現代音楽を普及している。同アンサンブルのエデュケーショナル・ディレクターの来日をきっかけに、94年日本現代音楽協会(坪能氏所属)主催でロンドン・シンフォニエッタの教育プログラムを实践する学校でのワークショップを開催した。同プログラムが学校教育、地域文化の育成に重要なコンセプトを持っていることから、97年にはサンシティ越谷市民ホールで「ロンドン・シンフォニエッタとともに」という、学校および音楽関係者のための大規模なワークショップを開催した。

て、地域の町内会や議員なども納得している。

- 障害者のプログラム、高齢者福祉施設での事業は、現在も実施しているが、もっと伸ばしていきたい。また、高齢者の自立には創造活動が有効なので、自立性のある音楽活動も今後広げたい。
- 医師によれば、喘息や自閉症の患者が音楽プログラムに参加するのは、心理的効果、身体的効果があるという。歌うことが呼吸法につながるからだが、医師がやらないと民間療法になってしまう危険があり、注意が必要。

◎ 教育関係者、アーティストとの関わり

- 音楽家や教育関係者など、事業に必要な専門家は、その都度依頼。そうした人たちを介して新たに関わりができるアーティストもいる。
- 学校の先生に、得意分野についてスポットで講座を持ってもらう場合もある。先生からは、学校で教えるのとは全く違う体験に、非常に緊張したという声が多く、いい経験になっているようだ。学校の先生を講師としてお願いする場合は、教育委員会を通じて校長会に連絡を入れる。
- アーティストには、教育的な配慮のできる人が非常に少なく、特に音楽関係者では希薄。本来、偉大なアーティストは、現場でのコミュニケーションをととても重視している人が多いが、アーティストの卵の中にはそうした理解のある人は少ない。
- アーティストは演奏の腕がよければいいのではなく、支援者がいるということが重要だと気づくべき。人間的な部分でファンがつくアーティストもたくさんいる。演奏の評価は人によってさまざまであるし、演奏は、うまい、下手の2極論ではない。

◎ 学校教育との関わり

- 教育プログラムづくりはホール単独でやっても

意味がない。教育の専門家と相談しながら、学校や社会システムの中でどういった位置づけにするか、また、市民の文化活動に関して、会館はいつ、どういった支援の手を差し伸べていくかを考えていく必要がある。

- 一人の先生の後には、大勢の生徒がおり、大きな影響力がある。市内の小学生すべての芸術教育を会館が引き受けるわけにはいかないので、学校の先生の育成に力を入れることが大切。
- 学校では、ロンドンシンフォニエッタ(*1)の音楽教育プログラムを行っており、研修を受けた先生の活動は、こちら側でたえずフォローアップし、その取組みを『教育音楽』、『音楽芸術』といった専門誌にレポートしている。
- これらの記事は、学校が何をすべきか、どうやって市民参加の事業を立ち上げるべきかという点でも参考になる。
- 育成とは教育だが、決して押し付けになってはいけない。例えば、子どもたちに、「...でしょ、わかった？」という言い方をすると逆効果になるし、「うるさい、静かにしなさい」という言葉でも、子どもたちは緊張し、心が離れてしまう。そういった現場の指導法のノウハウがあるので、雑誌に掲載され、学校の先生方の参考となるのだろう。
- これからの文化施設は「学校と社会の中間に位置する」ことが重要。つまり会館が学校教育、社会教育の両面に接点をもつプログラムを持つことが地域を芸術文化の面で支える会館の役割であり、そのための活動が「教育プログラム」。
- 一方、「教育プログラム」を受け入れる学校が特定の学校に限られていたり、受け入れたとしても協力体制が整わないケースも多い。
- ホール職員は本来一人一人が、地域により良い芸術文化を普及するコーディネーターであるべきだが、その認識はまだまだ低い。会館の企画に関わるプロ側も「教育プログラム」に対する

認識をもっと持つべき。そのためには、会館内の人材育成のためのプログラムが必要。

- 「教育プログラム」は教育的成果だけではなく、地域の人々、とくに次代を担う青少年少女にとって「豊かな生活のためのきっかけづくり」となるもので、会館の単独事業とせずに、行政も含んだ地域を巻き込んだプログラムとすべき。

5. 芸術普及活動の効果、今後の課題と展望

◎ 芸術普及活動の実施に伴う効果

- 「歌のおねえさん & おかあさん」をはじめとするボランティア・アーティストのアウトリーチ活動によって、行政の目が届かない地域も含め、市民による地域文化が育まれつつあること、市民相互の交流による事業が生まれていることが大きな効果。
- 芸術普及活動を行うことで、この会館の事業が何を考えて行われ、どういったことを市民に発信しているかということが、非常にわかりやすくなるという効果もある。
- また、雑誌や新聞に全国区で活動が紹介されることで、市外から評判が立ち、評価につながっている。

◎ 課題と今後の展望

- 大切なのは、技術的なことを教えるのではなく、信頼関係を築くこと。ワークショップで教えるのは技術ではなく、その場のコミュニケーションづくりの手法である。
- 劇場の仕事は、ホールという場とホールを支える人々を支えることであり、それを結ぶのは社会貢献だといえる。したがってこのホールのボランティア(市民アーティスト)は、常に社会貢献を意識しながら活動するというのが基本姿勢。
- 地域環境にあったプログラムをつくるには、参加全員で考えることが基本。そのためには技術教

育が必要な一方、技術のない人でも、技術を超えて参加できる文化生産の場を用意することが公共ホールの役割。そうした役割を公共ホールが果たすことによって、クラシック人口が増え、地域に芸術文化が普及していく。教育プログラムは、芸術普及事業の切り札。

- 地域のホールを利用するのは、半径10キロメートル圏内の人。その人たちが楽しめる手段は地域の環境によって違うので、それぞれの環境の中で何ができるかということを会館が考えればよい。お金がなくてもいい、技量は低くても構わない、どういうメッセージを市民に伝え、どういうふうに門戸を開いていくか。つまり、ホールは市民が集まれる広場づくりを進めるべき。
- そのため、ホールの職員はオーガナイザーとしての役割を勉強すべき。オーガナイザーとしての力量も必要だが、それよりもオーガナイズの意味がわかることが大切。